

命をつなぐ

小児がん

治療の

現場から

抗

がんの治療を開始して8週間目に入った、急性リンパ性白血病の小学生の母親が「発病、検査の繰り返し、がんの告知、そして治療開始、神に見放された気持ちでした。でも点滴をしながら院内学級に通い、学年も病氣も違う友だちと過ごす姿を見ると、わが家は負けるわけにはいかな」と胸中を吐露しました。

小児がんは治療を受ける子どもたち、両親やきょうだいにどうも家族の関係性が大きく変わるさまざまな体験となります。家族は子どもにある痛みや苦しみ、死に対する恐怖とともに無力さを感じています。私たち心理師は治療開始前から患者と家族に寄り添い、途切れることなく彼らの心配事に注意を払います。そして、家族が抱えているかもしれない問題（子どもの発達上の問題、家族の健康上の問題、家族内のコミュニケーション不足など）を理解し、解決するための支援をします。ほとんどの家族は治療の早い段階で家族の力を結集することができ、家族としての機能を取り戻します。

小児がん経験者は早期成人期（18歳～20歳）に治療や体調について周囲から気遣われることを負担に感じたり、治療のための欠勤や早退によって職場に迷惑をかけること

第⑧回 心の回復力を高める

子どもや家族に寄り添い 病氣や治療の不安を緩和

考え、居心地が悪くなったたりすること、そして不意に治療中の苦しい体験があったかも実際に経験しているように思いつかれること（心的外傷後ストレス症状）が発生しやすいとされています。

その一方で、がんを克服した経験は、個人の成長の糧となる可能性があり、人生の課題に直面するためのより大きな強さや知恵を育むことも分かっています。

心理師だけでなく、異なる専門性を持った多職種スタッフが心理的サポートに携わることや、子どもと家族の得意なことや困りごとがより立体的に見えてきます。個別性を尊重し、時に語り合い、時に傾聴し、私たちは治療終了後もさまざまな問題を解決しながら人生を歩んでいくことを支えます。

